

「あの日」の少年夢で訴え



子どもたちに被爆体験を語る河野キヨ美さん
11月2日午後、広島市中区

被爆の記憶 決意の代弁

14歳で体験した記憶を、子どもたちに語り続ける被爆者がある。広島市中区の河野キヨ美さん(84)。ただそれは、70歳

広島・84歳 河野さん 70歳過ぎる奔走

原爆が投下された翌8月7日、爆心地から35キロ離れた自宅から、病院に勤めていた姉を捜すため、母と一緒に広島市内へ向かった。狭い道路に足の踏み場もないほど、死体があちこちと転がっていた。内臓が飛び出し、炭のように黒焦げになった死体もあった。恐ろしくて母にしがみついていた。「今でもつま先に

あぶぶよとした感覚が残っています」

病院にたどり着き、姉の無事は確認できたが、病棟にはうめき声が響いていた。「水をくれ」「兵隊さん、助けて」…。玄関先の花壇には材木のように並べられた少年たちの遺体があった。学生服の胸の名札には「広島二中」とある。あどけない顔は眠っているようだった。「やけどもしていない私が傍観者のように語ってはいけない。死を冒瀆することになる」。戦後、

夢を見たのは70歳を過ぎたころだった。足にゲートルを巻いたあの少年たちが出てきて「早く僕たちのことを代弁してください」と叫んだ。

翌朝から絵筆を握り、20枚の絵を描いて一冊の本に仕上げた。「描きながら涙があふれました」。

タイトルは「あの日」を、わたしは忘れない」。2008年に出版し、それ以来、積極的に被爆体験を語る

を過ぎるまで長く心に封印してきた記憶でもあった。丸太のように積み上げられた少年たちの遺体が、目に焼き付いて離れない。やけどもしていない自分が語っているのか…。それでも語り始めたのは、ある日見た夢がきっかけだった。

少年たちの声は今も耳の奥で聞こえるという。「お母さんに会いたい」「おなかいっぱい食べたい」「勉強がしたい」…。何一つかなえられなかった少年たちに突き動かされるように語り部の活動を続け、年間50回を超える。

その中で最近、核や平和に対する社会の問題意識が薄れているように感じている。「多くの命の犠牲の上に今がある。命ある限り核兵器廃絶を訴えていきたい」。そこで子どもたちに語る時、最後にこう結んでいる。

「核兵器は人間の手がつくった。だから、人間の手で終わりにできるはず。諦めないで」

(古川幸太郎)

